



# 令和6年度 北海道開発局優良工事等表彰を受賞

今年度、北海道開発技術センターは、北海道開発局優良工事等表彰を受賞しました。業務名は以下の通りです。いただいた評価に恥じないよう、今後もみなさまの信頼と満足を得るために、職員一同、より良い成果品とサービスを提供してまいります。引き続き、ご指導のほど、よろしくお願いいたします。



令和6年度  
北海道開発局優良工事等表彰式

北海道開発局長表彰の受賞者  
(前列左:倉内理事長、前列右:藤井次長)

## ◆北海道開発局長表彰

札幌開発建設部管内  
地域協働型道路活用方策検討業務

### 【受賞理由】

本業務は、国道の整備・維持管理・利活用の推進方策検討において多岐に渡る項目を多数の関係者と短期間で調整を図ることが求められる難易度の高い業務でした。

地域との検討会で得られた知見を啓発・普及するため地域と連携した広報媒体を作成し、より効果が発揮する取り組みを行いました。併せて、地域と協働した草刈りやゴミ拾いの実施、エゾシカロードキル対策など、環境対策にも積極的に取り組みました。

具体的な取り組みメニュー検討においても、検討会の実施等、地域と連携した円滑な調査体制が構築されており、他の模範となる業務でした。



## ◆留萌開発建設部長表彰

留萌開発建設部管内  
協働型道路管理計画検討業務

令和6年度 留萌開発建設部優良工事等表彰式



留萌開発建設部長表彰の受賞者  
(左:倉内理事長、右:芝崎首席研究員)



# 第40回 寒地技術シンポジウム

第40回寒地技術シンポジウムを札幌市(会場:札幌コンベンションセンター)で開催いたします。寒地技術に関心を持つ多くの皆さまのお申込み、ご参加をお待ちしております。詳しくはdecサイト内ホームページ (<http://www.decnet.or.jp/project/ctc/>) をご覧ください。

■開催日:2024年11月26日(火)・27日(水)

■会場:札幌コンベンションセンター  
(札幌市白石区東札幌6条1丁目1-1)

### ■内容:

- ★聴講(無料).....【申込締切】11月14日(木)
- ★報告論文→申込・概要提出.....受付は終了しました  
報告論文原稿提出.....【締切】10月31日(木)
- ★ポスター(ポスター発表)※今年度より新設されました  
申込・概要提出.....受付は終了しました
- ★技術展示.....受付は終了しました
- ★発表概要集(1冊2,000円[予価])※当日資料代としてお支払いください
- ★懇親会・・・11月26日(火)開催予定(有料)

プログラムは10月下旬  
ご案内の予定です



懇親会場内に作られた「やきそば弁当」タワー(笑) ※約150個

## 編集後記

先日開催された第27回(一社)日本福祉のまちづくり学会全国大会(札幌大会)は、台風の影響で発表キャンセルが相次ぎましたが無事閉会となりました。市民参加プログラムも、近隣の子どもたち等多くの方にご参加いただけひと安心。一番気合を入れた(笑)懇親会は、北海道科学大学の先生や学生の皆さんの運営の下、アイヌ舞踏や歌のステージ、北海道らしい料理やお酒が並び大変盛り上がりしました。また、懇親会のお土産に、石田真二副学長の計らいで北海道限定「やきそば弁当」を全員にプレゼント!(太っ腹!)。ご参加いただいた皆さまどうもありがとうございました!(M.K)



# dec monthly

2024.9.1 vol.468 デックマンスリー



- Monthly Topic (マンスリートピック)  
第2回 全道みち学習交流会 開催報告
- dec Report (デックレポート)  
認定NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム  
第6回シンポジウム ポスターセッション

dec Interview >>> 札幌国際大学 教授 朝倉 一民氏

文科省のGIGAスクール構想の始動は2019年。朝倉一民さんはその約10年前から小学校教諭として教育現場のICT活用に携わり、札幌の雪学習の進展にも貢献されてきました。今春、教育工学の専門家として大学教員に転身された朝倉さんにICT教育や新たなほっかいどう学への取り組みについてうかがいました。

大学卒業後、札幌市内の5つの小学校に勤務し、豊富な現場経験をもとに札幌のICT教育をリードしてこられました。まずはICTにかかわるきっかけについてお聞かせください。

それは、山の手南小学校での新保元康先生(現・認定NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム理事長)との出会いが大きいですね。同校には2000～09年度に勤務したのですが、その間に新保先生は、最初は北海道教育大附属小から教諭として赴任され、教頭になって一度、別の学校に移られたあと、また、校長になって戻ってこられました。

先見の明のある方で、当初は個人情報データのセキュリティシステムの導入などICTを校務に活用される取り組みをされていましたが、徐々に実物投影機など授業での活用に幅を広げていきました。教育工学の第一人者である堀田龍也先生(当時・静岡大学)には雪学習の研究会を通じた交流やその後のICT機器の授業活用の助言や指

導にかかわっていただいたこともあり、徐々に山の手南小はICT教育の試行の舞台ようになっていったのです。

2009年に文科省の「スクール・ニューディール構想」(学校ICT環境整備事業)がスタートし、札幌市内の小中学校には50インチのモニターが各教室に配備されたり、教育用・校務用のPCや、校内LANが整備されたりしましたが、それよりも前に山の手南小では中古PCが教職員に1人1台与えられてネットワーク上で校務をする体制になっていました。いわば、この学校が札幌のICT教育のパイロット校ようになっていったのですが、ここでICT担当を務めたことが、私がICT教育に携わる出発点になりました。

ただし、もともとPCが好きだったり得意だったりしたわけではありません。使っていくなかで自分なりにICT活用でよい授業ができそうだなと思い、ハマっていったという感じです。

大学の専攻は社会学で教科は社会科。教育実習のときから社会のなかのネタを教材として開発する面白さを感じてきましたが、ICTでさらに面白く子どもたちの「はてな」(問い)を生ませられると思い、自分のなかで社会科の教材開発とICTが融合していきました。

次に赴任される屯田北小学校では、さらに「児童1人1台端末」に向けて独自の試行を重ねていけますね。

山の手南小時代に新保先生や堀田

「二人一台端末」が子どもたちの深い学びに役立つ手応えを感じてきました。ICT教育や雪学習で積み重ねてきた、教材開発などの経験をほっかいどう学に生かしていきます。

## dec Interview

あさくら かずひと

1972年札幌市生まれ。95年北海道教育大学岩見沢校卒業後、札幌市立小学校の教諭を務め、24年3月、発寒小学校教頭を最後に退職。同年4月から現職。放送大学大学院修士課程修了(情報学)。文科省学校DX戦略アドバイザー、デジタル庁デジタル推進委員、札幌雪学習プロジェクト副座長などを務める。著書は「苦手でも出来る!!ICT&AI超入門-個別最適な授業づくりから仕事術まで」など多数。リラックスタイムは海外ドラマを見ながらの原稿執筆、講演旅行の合間の取材、ジムのプール。





共同編集機能をつかってチームでお店を紹介するポスターを作成しています

先生のもとで民間財団の研究助成申請をすることがあったのですが、その経験をもとに屯田北小では単独で(公財)パナソニック教育財団の研究助成に挑戦。2012年度、14年度に助成金を射止めることができました。また、札幌市の夢づくり支援の助成も受けることができ、それをもとに当時、出回り始めたアップルのタブレット型コンピュータiPadを55台購入して、児童1人1台端末の授業実践を始めました。政府のGIGAスクール構想のかなり前のことですから、先進的なことをほぼ自力で実現したことになりますが、とにかく1人1台あれば、子どもたちが自分の学びを充実させていけるだろうという強い期待がありました。

しかし、やはり当初は悩みや試行錯誤が多かったですね。お絵描きやパズルなどいろいろな無料アプリがあるので、苦勞して大量のiPadにダウンロードし、子どもたちに体験させたものの、それらを効果的に授業に生かすにはどうしたらよいのか、大いに考え込みました。台数が多いだけにトラブルが発生することも多く、その対応にも苦慮しました。

最大の課題は、従来の教育システムにはないことをしているので、先生方に授業のイメージがなく、PCの必要性を感じてもらいにくいことでした。どうやって多くの先生が使いたくなるように汎用性を高めていくのか。児童の端末を先生が一括してコントロールする授業支援ソフトの導入など模索を続け、少しずつ手応えを感じるようになりました。

例えば、タブレット端末はノートに書いたり、深く考えたりすることが難しい子どもでも、より直感的に反応を

示すことができます。授業の核になる画像を子どもたちに一斉に送り、問いを投げかけて子どもたちが個々の端末で回答を返す、というようなことをすると、今まで手を挙げて答えられなかった子どもの反応が把握でき、目配りしやすくなりました。ICTが教育の個別最適化に役立つことが腑に落ちるようになってきたのです。一斉授業でハイ、ハイと元気に子どもたちが手を挙げるのが従来の良い授業でしたが、もはやそういう時代ではなくなりました。ICTが教育の個別最適化に役立つことが腑に落ちるようになってきたのです。一斉授業でハイ、ハイと元気に子どもたちが手を挙げるのが従来の良い授業でしたが、もはやそういう時代ではなくなりました。

先生の経験をもとに屯田北小では単独で(公財)パナソニック教育財団の研究助成に挑戦。2012年度、14年度に助成金を射止めることができました。また、札幌市の夢づくり支援の助成も受けることができ、それをもとに当時、出回り始めたアップルのタブレット型コンピュータiPadを55台購入して、児童1人1台端末の授業実践を始めました。政府のGIGAスクール構想のかなり前のことですから、先進的なことをほぼ自力で実現したことになりますが、とにかく1人1台あれば、子どもたちが自分の学びを充実させていけるだろうという強い期待がありました。

**雪学習の普及を図る「北海道雪プロジェクト」に本格的に参画されるのも2010年ごろのことですね。引き続き、「札幌雪学習プロジェクト」の展開を支えてこられました。**

屯田北小に赴任した2010年に道教育大教授の高橋庸哉先生の共同研究に参加し、雪学習の資料や授業プラン、児童用テキスト、また、すでに2001年に開設されていたウェブサイト「北海道雪たんけん館」のコンテンツ開発に携わるなど「北海道雪プロジェクト」(以下、雪プロ)の活動に参加するようになりました。屯田北小が市内でも雪深い地域にあったことも雪学習に関心を深めた理由の一つです。

雪プロ関連の取り組みの一つに札幌市建設局雪対策室との連携で行われてきた「雪と暮らすおはなし発表

会」があります。これは札幌市内の小中学生が公開の場で雪について学習したことや感じたことを表現する年1回のイベントで、サッポロファクトリーを会場に始まり、近年はチカホで開催されて今年で第18回になります。このイベントに現在のようなコンテスト形式を取り入れたのは私でした。

2012年からのことで、それまでは単に順番に発表するプログラム構成だったのですが、子どもたちが課題を見つけてグループで問題解決し、成果をプレゼンテーションするという「プロジェクト型学習」(PBL)の考え方を取り入れ、プレゼンの内容を評価する発表会に再構成したのです。ちょうど札幌市が「雪・環境・読書」を特色ある教育の柱として打ち出した時期で、個人的にも「ICT」、「雪」、「プロジェクト型学習」がうまく結びついていきました。

2015年には札幌市建設局雪対策室を事務局に市教委職員や小学校教諭、土木センター職員で構成するプロジェクトチーム「札幌雪学習プロジェクト」が立ち上がり、雪学習の展開は加速されます。私は市内小学校教員を対象にしたニュースレター「雪学習NEWS」の編集に携わってきましたが、今年3月に50号記念号を発行することができました。

2000年に道教育大を中心に始まった雪プロの取り組みと成果は、19年の認定NPO法人ほっかいどう学推進フォーラムの設立以降、同フォーラムと「札幌雪学習プロジェクト」に受け継がれています。



第18回 雪と暮らすおはなし発表会  
【会場:札幌駅前通地下広場(チ・カ・ホ)北3条交差点広場(西)】



札幌雪学習ニュースレター「雪学習NEWS」No.50号(発行:2024年3月)

**今年度から認定NPO法人ほっかいどう学推進フォーラムがホームページで提供するほっかいどう学のデジタル副読本の制作の先頭に立たれることになりました。**

これまで雪学習でやってきたことを振り返れば、すでに「ほっかいどう学の雪部門」をやってきたと言えるかもしれません。お話を伺っていて、ICTによる教材化ならば、これまでの蓄積で力が発揮できそうだと思います。

現在、少しずつ制作を進めているところですが、とりあえず、社会科に都道府県に関する学習が入ってくる小学4年生を対象にした内容から着手しています。地形編、市町村編、交通編など分野別に分け、北海道を俯瞰できる内容を目指していますが、難しいのは何をどこまで取り上げるかの情報の選択です。例えば、179の全市町村を網羅的に扱うことはできないけれど、北海道全体が見える、わかるようにしなければならぬ。それが北海道を学ぶための概念的知識をつくるということです。このような取り組みは、先日の「第16回土木と学校教育フォーラム」(8月4日・東京・(公社)土木学会主催)でもポスターセッションで紹介したところです。

実は、郷土学習を含め社会科は教員には教えにくく、子どもたちには人気のない教科です。数字の計算、漢字の練習、理科の実験などと違って、「社会」という簡単には捉えられない、茫洋としたものを対象にしているからだと思いますが、そこを教材化して捉えやすくし、見えないものも実感させるのが概念的知識の構築です。デジタル副読本でもそれを目指していきます。

**GIGAスクール構想から5年、基本的なICT環境は全国的にほぼ整ったと言われています。これからのICT教育の課題とはどのようなことでしょうか。**

懸念しているのは、子どもの力を伸ばすために活用してほしいICTが、単に教員の仕事の効率化の道具として使われるようになることです。

というのも、ここ数年コロナ禍もあり、教員の働き方改革も現場で盛んに言われるようになりました。文科省や教育委員会は規定の時間で教えることを重視するようになっており、教員の間にはじっくり時間をかけて教育に情熱を注ぐことが良いことではないような空気が広がっているように感じています。特に若い先生たちは、いかに短時間に教科書通りに教えるかという効率を最優先にする傾向が強い。ICTによる効率化で生まれた放課後の余裕を教材研究やスキルアップに使えばよいのですが、ただ休む時間を増やすことにつなげようとするなら、まずいことです。ICTに頼って子どもに向き合う時間さえ効率化されるとすれば論外ですね。

今後、教育現場はリアルな空間とバーチャルな空間の両方を包含する方向になると思いますが、そこで教員にとって重要なのは全体を俯瞰する力であり、両者を適切に組み合わせるバランス感覚だと思います。例えば、不登校の子どもは自宅でオンラインによるバーチャルな学習に参加すればそれでよし、などと単純に割り切るような見方は困る。子どもそれぞれの個性や時間的な経過を広く見渡して、リアルとバーチャルのバランスを判断する必要があります。言い換えれば、教員は教室の現場と離れた空間や時間に対してもアンテナを働かせなければならない。それにはアンテナ自体を新しくして、教育観、授業観、また児童観を根本的に転換していく必要があります。そ

れがまさにDXということです。しかし、現状は全く追いついていないですね。ここに大きな課題があると思っています。

**研究者、大学教員に転身され、今後ますます幅広いご活躍が期待されます。**

研究者を目指す気持ちはかなり前からおぼろげにはあったのですが、具体的に進路を考え、準備を始めたのは教頭になって間もなくのコロナ禍の時期でした。学校が休校になるなどして思いがけなく時間に恵まれ、進路を考えたり、研究職に向けた勉強をしたりすることができました。

とりあえず修士をとろうと2021年から放送大学で情報学の修士科目をオンラインで履修し、さらに2年、修士論文執筆に充てて24年春に修士号をとりました。幸いなことに札幌国際大学とのご縁があり、大学教員として働く夢を叶えることができました。これまでやってきたことが一つの方向に集約されて行きつくべきところにたどりついたという達成感があります。そういう意味では、コロナ禍は私にとっては追い風に働いたと言えるかもしれません。

現在、基盤教育部で全学の1年生を対象に、情報機器操作などICT系を中心に大学で学ぶための基礎的な知識や技術に関する授業を担当しています。今後、地域の商店街などとコラボして商品開発するなど、学生たちのプロジェクト型の取り組みを通じて地域社会に貢献できるようなことができればいいと考えています。



近年執筆された著書



dec理事長倉内公嘉の開会挨拶に続き、上川、釧路根室、渡島檜山の3地域のみち学習の先生方から、子どもの主体的な学びをサポートする教材作成の工夫や地域課題をテーマとしたトライアル授業の成果などを発表いただきました。

実践報告 1  
上川  
みち学習

動画作成の哲学 ～授業実践(5年 自然災害を防ぐ) もっと子どもたちが自分の学びに生かせるように～

旭川市立旭小学校 教諭 井須 哲朗氏

社会科5年生「自然災害を防ぐ」の単元で使える動画作成に取り組みました。作成にあたっては子どもたちの集中力や、考える時間を奪わないためにも3分以内とすること、キャラクターの統一化、子どもたちが自分の問いをもとに考え、自らアクセスする動画という視点を大切にしました。今後、動画コンテンツが増えることで子どもたちの学びの選択肢が広がっていくと感じています。

授業実践では社会科が専門ではない先生にも協力いただきました。これまでは学習過程は教師だけが知っ

ているものですが、単元の流れや目指すゴールを子どもたちと共有しながら、学びの道のりをイメージできるよう授業を進めました。また、子どもたちの主体性を尊重しつつも、調べるポイントを示すなど、「学び方の指導はためらわない」ことが重要だと考えています。今年度は上川以外の地域の皆さんにもアクセスしてもらえるような動画制作に取り組みたいと考えています。



意見交換

- 5年生の自然災害の単元は全国の学習になるため、扱いにくいところがあるが、教材によって学びが深まったという点があったか。
- 水害や雪害など市町村ごとに扱う災害が異なるため、コンテンツ整備が重要だと考えている。除雪の動画など、実際に動く映像を見ることで学びの深まりを感じた。
- 「学びの道のりをイメージ」できるというのは、全体像を示すということで、非常に良いと思った。先が分かると予習できるという利点もある。



意見交換

- 開発局から提供いただいた資料は事前に読み込んで授業に臨んだ。ロードキル対策のオーバーブリッジなど、実際に鹿が通っている写真を提供いただき、確証をもって子どもたちに伝えることができた。
- 道路行政でも「ネイチャーポジティブ」という言葉も使われるようになってきている。発展的には鹿だけでなく、鳥類などのロードキル対策も取り入れていただければ。
- 北海道の財産は豊かな自然であり、世界遺産にもなっている。一方で、人間社会とのせめぎ合いの中でどう考えるか、という視点は、今の授業に必要な「見方・考え方」を鍛える非常に良い授業。



dec理事長  
倉内 公嘉



伊藤 典弘 氏  
(北海道開発局 建設部  
道路計画課  
道路調査専門官)



井須 哲朗 氏



古内 祐介 氏

# 第2回 全道みち学習交流会 開催報告

認定NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム事務局長・一般社団法人北海道開発技術センター 参事 宮川愛由

7月27日(土)にdec、認定NPO法人ほっかいどう学推進フォーラムの主催により、「第2回全道みち学習交流会」が開催されました。全道10地域で展開されている「みち学習」の活性化を目的として、各地のみち学習に関わる学校教員、開発行政担当者、事務局45名が一同に会し、情報共有、意見交換を行いました。

実践報告 3  
渡島檜山  
みち学習

変遷図から学ぶ 「わたしたちの市の歩み～市のうつりかわり～」

函館市立八幡小学校 教諭 阿部 聖氏



3年生社会科「わたしたちの市の歩み」の単元でトライアル授業を行いました。「交通」を例にとると、教科書は扱っている地域が違うこと、副読本は交通の広がりや、他の事象との関連が捉えにくいという課題がありました。そこで、みち学習検討会の中で交通機関、道路網の変遷図の作成に取り組みました。一人一台端末を活用し、昭和20年と令和5年の地図を見比べて、道路の移り変わりを学習しました。子どもたちは函館に新しい国道ができたこと、高規格道路によって函館空

港から木古内町までつながったことなどに気づいていきました。授業後は「資料がわかりやすかった」という声がありました。一方で情報量が多いという指摘もあり、個別最適な学びを活かし、ベースとなる情報、さらに発展的な情報、という形で提供してはどうか、といったご意見もいただきました。今後は今回作成した指導案や教材の活用方法について検討していきたいと考えています。



意見交換

- 変遷図は非常に素晴らしい資料。副読本の制作に携わっているが、写真はあっても地図がなくて苦労している。
- プラットフォームでこうした資料が共有できると子どもたちも学びやすくなっていくのではないか。
- 開発局には道路の変遷がわかる情報がストックされている。一方で、そうした情報をどう活かしていくか、については教育現場の先生の発想が必要。



続いて、NPOほっかいどう学推進フォーラム新保元康理事長より、「みち学習」の今後の方向について発表がありました。

2024みち学習の方向(案) ～みち学習もほっかいどう学も 第2ステージへ～

みち学習アドバイザー・認定NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム 新保 元康氏

「みち学習」も第2ステージに入り、本局のサポートもいただきながら活動を推進しているところです。昨年度の大きな成果として、北見市でも副読本に「除雪」を掲載いただきました。一般化に向けた大きな前進です。こうした動きが広がり、「みち学習」が空気のように学校教育に溶け込んでいくことが理想です。デジタル時代の学びとして、ネット上にはコンテンツが用意されつつありますが、北海道のコンテンツはまだ少ないのが現状です。NPOが開発中の「プラットフォーム」には皆さんと一緒に作成した動画や教材の他、民間団体や企業が社会貢献として作成した資料や動画も掲載することが出来ます。コンテンツが増えていくことで、これまで難しかった国土やインフラに関連する教材を提供しやすくなります。デジタル教材の品質向上にも取り組みたいと考えています。これまで「みち学習」の成果として100本以上のコンテンツができました。3分程度の短い動画であること、そし

て、内容はわかりやすく、優しすぎず、そして面白く、知的好奇心をくすぐるものであることが大事だと考えています。

「道路」という単元がない中で、一般化を目指すには、道路を少し幅広い文脈で捉えることが必要です。道路は人々の生業の場所であり、文化が生まれる場所。道路にフォーカスしながらも、地域のニーズを掘り起こし、必要とされている学習コンテンツを創造していくことで、もっと先生方に使ってもらえるのではないのでしょうか。そして、一般化のレベルは高くなければいけません。我々自身が、道路の価値を改めて学び、自分の言葉でその価値を語る事ができる、ということが非常に重要です。そのためにも、みち学習に関わるメンバーが更に仲良くなって、会う機会、言葉を交わす機会が増え、道路以外でも情報交換ができるような関係性ができればと願っています。



新保 元康 氏



第6回 シンポジウム

# ポスターセッション

認定NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム

2024年7月26日(金) / 主催: 認定NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム / 札幌国際ビルディング8F国際ホール



## 石狩空知みち学習

### 高橋敏五郎～道路の神様と呼ばれた技術者

発表者: 矢島 勲氏(千歳市立泉沢小学校 教諭)

高橋敏五郎は「弾丸道路」(国道36号/札幌・千歳間の約35km)の舗装整備工事を1952年から1年余りで完成させた技術者で、道路舗装工事の近代化の礎を築いた人物です。小学6年の道徳で、高橋が北海道の人物であることを知り、地域の幹線道路として国道36号への誇りと愛着を深めることをねらいとした授業を行いました。

導入として、事前に実施したアンケート結果から児童の国道36号に対する愛着が薄い現状を確認。それを踏まえてテーマへの問題意識を高め、高橋の画期的な工事の取り組みをまとめた動画クリップ4点(北海道土木資産伝承プロジェクト企画・制作の動画から教材として作成)を視聴。そこで感じ取った道徳的価値は何か、高橋が「道路の神様」と呼ばれるようになった理由は何かについて発言したり、ジャムボード\*に記入しました。みち学習検討会の意見交換会では「道徳としては新しい授業スタイルで、可能性を感じる」などの感想をいただきました。



## オホーツクみち学習

### 地域の魅力を子どもたちが発見! 配信! ブラッシュアップ! 「子ども版シーニックバイウェイ」の取組

発表者: 渡場 陸氏(北見市立三輪小学校 教諭)

網走市立東小では、小学5年総合的な学習の時間(全15時間)で、身近な地域の美しい景観など網走市の魅力を発信する「子ども版シーニックバイウェイ」のスライド作成を行って今年で3回目になります。授業の7時間目では作成したスライドをよりよくする方法を考えることを課題とした授業を行いました。

昨年度、教材として作成した「東小シーニックバイウェイ2023」のポスターやシーニックバイウェイのホームページなどを参考にグループごとにスライドの改善点を考えてまとめるとともに、著作権や情報の信頼性など情報発信する上で配慮すべきことも学びながら、今後の改善の取り組みへの見通しをつけていきました。

ふるさとの良さを発信しようという実践は従来も多くありましたが、発表して終わりではなく、発信したものをどう改善するかを考えるという「思考のサイクル」「探求のサイクル」が評価された取り組みとなりました。



## 後志みち学習

### 交通(道路・鉄道)に着目した 小樽市の移り変わりに関する教材の作成及び授業実践

発表者: 寺下 剛史氏(小樽市立花園小学校 教諭)(代理発表: dec橋本 滯奈)

小学3年社会科の授業で「小樽市の交通はどのように変わってきたか」を課題に取り組みました。時代とともに自分たちのまちがどう広がり、道路網や鉄道がどう変遷していったのかを調べる上で、児童にも捉えやすい適当な地図資料がなかったため、市内小学校への一般化も見据え、改善を重ねて教材を作成しました。

授業では、小樽市の道路や鉄道などの交通について「何が・いつ・どこが・どのように・どうして」変わってきたのかを考えました。新旧の交通網地図を比較して気づいたことを共有したり、ネット検索するなどして調べ、わかったことをジャムボード\*やスライド、ノートにまとめました。授業後の意見交換会では、児童同士の意見の共有や交流を増やすようなしぐみの必要性について指摘がありましたが、次のステップとしてクラウド上でのチャットの活用による意見の共有も考えたいと思っています。

シンポジウム開会に先立ち、全道各地の小学校でほっかいどう学が関わったプロジェクトを紹介するポスターセッションが行われました。特設会場に掲示された授業例は14件。それぞれ①目的・授業化の視点、②単元計画、③作成した教材、④授業の実践・授業の流れ、⑤授業のとりまとめ、が示され、ポスターを前に実践者が解説したり、参加者との意見交換が行われてにぎやかな交流タイムとなりました。ここでは学校と地元の開発建設部の連携による「みち学習」の授業例6件について概要をご紹介します。

<注: 文中の※はパソコンを活用した授業におけるICTツールの名称>



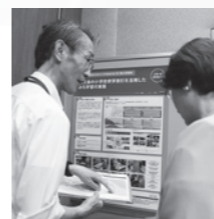
## 留萌みち学習

### 「道の駅」をテーマとした「みち学習」

発表者: 高橋 基文氏(留萌市立留萌小学校 教諭)(代理発表: dec小西 信義)

小学3年社会科「わたしたちの市の歩み」におけるみち学習の実践を行いました。この授業実践では、「道の駅るもい」を学習課題とすることで、公共施設の働きを知ることに加え、留萌のまちづくりの変遷を理解することを狙いとしています。そのため、留萌ICの2020年度供用開始前後の道の駅の立地環境や役割、交通の変化についても着目しています。作成した主な教材は「道の駅るもい」の機能や歴史、将来のあり方に関する動画7点です。

授業は道の駅についてのイメージをウェビングマップ\*に書き出すところから始め、その後、動画などで実際に道の駅の役割や働きについて調べました。さらに「どうして道の駅るもいが、この場所に立地しているか?」といった問いを立て、昔と現在の航空写真を見て比較することで、留萌市の交通モードの変遷との関連性に児童たちが着目できるように話し合いを通して導きました。また、道の駅が交流人口の増加という将来に向けた役割も持っていることを知ることで、留萌市のまちや交通の変遷とを関係づけて道の駅の役割をより深くとらえることができたと思います。



## 宗谷みち学習

### 礼文島の小学校修学旅行を活用したみち学習の実践

発表者: 山本 真司氏(利尻町立仙法志小学校 校長)(代理発表: 白鳥 智久氏(国土交通省 北海道開発局 稚内開発建設部))

礼文町では3つの小学校(香深井小、礼文小、船泊小)が合同で旭川市に2泊3日の修学旅行を行っており、旅行の「移動」を学びにつなげるようにみち学習に取り組みました。

事前学習では「みちクイズ(スライド)」、「道の駅写真クイズ」、「道の駅機能説明資料」を活用し、各校の児童が3グループに分かれて正解を競い合うなどコミュニケーションを深めながら楽しく学びました。旅行当日は「道の駅振り返りシート」を用いて、休憩で立ち寄った「道の駅ながわ」、「道の駅もち米の里なよろ」の休憩機能、情報発信機能、地域連携機能を現地で探したり、気づいたことを記録しました。

生徒同士のコミュニケーションを促し、修学旅行の移動を学びにつなげるみち学習を展開できましたが、それが普段の学習や生活につながることで、さらに生きた学習になると思います。本取り組みは教材の改善を進めつつ、宗谷エリアの他校でも活用できるようにしていきたいと思っています。



## 胆振日高みち学習

### えりも町における「黄金道路」を題材とした授業の実践

発表者: 菊地 里美氏(北海道教育庁 日高教育局 教育支援課義務教育指導班 指導主事)

「黄金道路」(国道336号/えりも町・広尾町間の約33km)について小学6年生を対象に、社会科(2時間)で理解を深めた上、総合的な学習の時間(10時間)でその魅力を発信するための紹介動画の作成に取り組みました。室蘭開発建設部で作成されたスライド教材(全43枚)で学習し、現地見学を行って「黄金道路見学シート」に感じたことや動画に入れたいことなどを記録しました。

それらを踏まえて「黄金道路を通ったことのある人」向けと「ない人」向けの2種類の動画づくりを前提に、黄金道路について知ってもらいたいこと、来てもらうために伝えたらよいことについてロイロノート\*を活用し各グループで考えるなどして絵コンテを作成しました。児童から「黄金道路の名前の由来をどちらの動画にも入れることができよかったです」などの感想がありました。授業者としては伝えるべき情報の精査や取捨選択にもっと時間をかけてもよかったなど感じています。

文責: dec